

## 資料

1970年代イギリス視覚障害教育におけるインテグレーションをめぐる  
議論とその特徴

宮内 久絵

本研究は、1970年代にイギリスの視覚障害教育において展開されたインテグレーションをめぐる議論を、2つの主要雑誌を元に整理した。インテグレーションをめぐる議論は1973年ごろから見られ始め、1975年をピークに活発化した。三分した議論を整理すると、盲学校における分離教育が視覚障害児にとって最適な教育環境だとする分離教育を支持する意見、通常学校での教育すなわちインテグレーションが最適な環境だとし、盲学校の存在を認めないフル・インテグレーションを支持する意見、そして両者の中間にあたる盲学校とインテグレーションの共存を支持する意見があった。いずれの立場も、インテグレーションの教育的・社会的意義、および視覚障害児が教育を受ける上で必要となる支援については共通した意見を有していたが、支援が提供できる場やインテグレーションの恩恵を受ける対象において相違がみられた。

キー・ワード：インテグレーション イギリス 視覚障害教育

## I. はじめに

本研究は、1970年代にイギリス<sup>1)</sup>の視覚障害教育において展開されたインテグレーションをめぐる議論の具体的内容について、2つの主要雑誌を整理することにより究明することを目的とする。

イギリスは、諸外国の中でもいち早くインクルーシブ教育に着目し、その実現に向けて法的整備を進めてきた国である。それゆえ、日本においてもイギリスのインクルーシブ教育の制度や実際、その移行経緯に焦点をあてた研究が積極的に進められてきた（新井, 2000；河合, 2007；徳永, 2005）。

インクルーシブ教育は、各国の文化的・社会的背景を反映したものであるため、その意味や目的は国によって異なることは周知のとおりで

ある。したがって、イギリスのインクルーシブ教育をより深く理解するためには歴史的分析、とりわけインクルーシブ教育の源であるインテグレーションが提唱された時期からの分析が欠かせない。さらに、イギリス国内ではてんかん児や聴覚障害児などの障害種は、1950年代中期からインテグレーションが積極的に実施されてきた一方で、視覚障害児については、1970年代初頭の段階では実に9割の視覚障害児（全盲児）が寄宿制の盲学校で学んでいた。Morris and Smith (2007)によれば2007年現在、初等教育段階では視覚障害児の72%が通常学校で学んでいるが（Morris & Smith, 2007）、こうした変化が本格化したのは1980年代になってからであった。つまり、障害種によってインテグレーションの実施時期が大きく異なっているのである。これは、障害種別ごとにインテグレーションへと移行した経緯や目的に相違があることを示唆しており、障害種別ごとに見ていくことが

イギリスのインクルーシブ教育の解明には必要と言える。

本研究が焦点をあてる視覚障害は、上述の通りてんかんや聴覚障害等と比較してインテグレーションの実施が遅かった障害種である。その理由の一つには視覚障害という障害特性が関係しているように思われる。視覚障害は障害の特性上、点字や歩行などの特別なカリキュラム・指導法が必要であるため、通常学校で展開されるカリキュラムや指導法との軋轢がより顕著に表れることが容易に想像できる。Oka and Nakamura (2005) も、アメリカ合衆国において1990年代に発生したあらゆる分離的形態を否定するフル・インクルージョン論とその議論を明らかにした論文の中で、視覚障害を、フル・インクルージョン論に真っ向から反対した障害種として紹介している (Oka&Nakamura [2005] 551)。

このように通常学校で学ぶ際に困難を伴う視覚障害教育に焦点をあて、そこで生じた議論を明らかにすることは日本の視覚障害教育のあり方だけでなく、同じく特別なカリキュラム・指導法を必要とする重度・重複障害児など他の障害児の教育のあり方にも示唆を与えると考える。

本研究が焦点を当てる1970年代は、イギリス国内で視覚障害児の教育の場をめぐる検討が積極的に行われた時期であった。当時、視覚障害児は5歳から16歳までの義務教育期間を寄宿制の盲学校や弱視学校で過ごすのが一般的であったが、1950年代に未熟児網膜症による視覚障害児の爆発的増加に伴い規模の拡大を図った盲学校の多くが、定員充足率の低迷に直面していた。また、他の障害種ではインテグレーションが進みつつあった上、政府も全国的なインテグレーションの実行に向けて検討を進めていたのである。こうした背景のもと1968年にインテグレーションを含め視覚障害教育のあり方を再検討することを目的とした諮問委員会が設置され、1972年にはその成果を綴った報告書 (Education of the visually handicapped: report of

the committee of enquiry appointed by the Secretary of State for Education and Science in October, 1968)、通称バーノン報告 (Vernon Report) が発行される。さらに翌年にはバーノン報告に対する意見書が障害当事者団体より提出され、インテグレーションの是非が議論されることとなる。

1970年のイギリスの視覚障害教育に関連する先行研究は、国内外ともに、French (2006) ならびに宮内 (2012) によるものがある程度であり、いずれもインテグレーションをめぐる議論の詳細については明らかにしていない。

本研究は文献研究である。主な資料は *Teacher of the Blind* (1970-1979) 及び *New Beacon* (1972-1979) である。*New Beacon* とは1917年に、全国盲人協会 (National Institute for the Blind, 現在の王立盲人協会) によって発刊が開始された月刊誌である。*New Beacon* の購読者は、視覚障害児者の教育・医療・福祉にかかわる専門家を始め、失明傷痍軍人を含む視覚障害当事者や視覚障害児の保護者であった。教育のみならず、視覚障害者の就労や生活全般にかかわる情報を扱う雑誌として知られる。

一方 *Teacher of the Blind* は、イギリス国内の盲学校教員の養成を一括して行っていた盲学校教員養成協会 (College of Teachers of the Blind) が発行する雑誌である。同機関では職業訓練部門・施設の専門教員の養成も併せて行っていたため、雑誌に掲載される記事は教科教育から職業教育までと幅広い。読者は視覚障害当事者を含む視覚障害教育・福祉分野に携わる専門家であった。両雑誌を対象とした理由は、第一にイギリス視覚障害教育・福祉分野を代表する全国誌であること、第二にこれらを組み合わせることによって教育・福祉分野の専門家のみならず、視覚障害当事者や保護者の意見を把握することが可能となり、当時のインテグレーションをめぐる議論を多面的に解明することが可能となるからである。

雑誌記事の抽出にあたっては、まず、目次から視覚障害児の教育の場や、インテグレーション

## 1970年代イギリス視覚障害教育におけるインテグレーションをめぐる議論とその特徴

ンに関連する記事を選定した。なお、1960年代は「インテグレーション」以外にも「オープン・エジュケーション (open education)」などの呼称が存在したため、表現にとらわれることなく、教育の場に関連する記事を幅広く選定するよう心掛けた。目次からは判断できないもの(例えば投書欄 [letters] など)についてはすべての記事に目を通した。そのうえで内容を①インテグレーションの定義、②対象、③具体的方法、そして④インテグレーション実施の教育的・社会的意義の4つの観点から分析した。さらに、可能な限り、投稿者の詳細(職業、性別、視覚障害の有無)も合わせて整理した。

## II. 視覚障害教育におけるインテグレーション議論の発生とその背景

2つの雑誌において1970年代に掲載されたインテグレーションに関連する記事は、計33編であった。時系列に整理すると、1970年から1972年までの期間に掲載されたものはなく、1973年になって4編、そして1974年には6編と増加していく。1976年には最も多い12編の記事が投稿されている。しかし、その後は再び減少し、1976年には8編、1977年には3編となる。これが1970年代においてインテグレーションに関する記事が掲載された最後の年となる。

1973年、すなわちインテグレーションに関する記事が最初に散見されるようになった年の内容を整理すると、これらは基本的に、バーノン報告(1972)に関する意見や感想と共にインテグレーションについて触れられた内容となっている。

バーノン報告とは、先述の1968年に教育省の要請を受けて設置された諮問委員会が「盲児及び弱視児の学校及び教育サービスの形態を見直し、勧告を行うこと」を目的として4年の歳月をかけて作成した報告書であった。同報告書は、視覚障害児教育の在り方を盲学校制度のみならず、医療、福祉サービス、さらに教員養成の在り方など総合的に再検討したものであっ

た。バーノン委員会が政府に提出した勧告には、既存する盲学校と弱視学校を統廃合し、可能な限り多くの視覚障害児が自宅から1時間以内で通学できる範囲に盲学校(弱視学校と統合した)を再配置するというものがあった(Department of Education and Science, 1972)。つまり、従来の分離教育を前提とした勧告を行ったのである。この時期によせられた記事は眼科医であったHartcourt(1973)によるものを始め、バーノン委員会の専門性の高さや調査に対する献身的な姿勢を高評価し、勧告の内容を全面的に支持する内容のものが多い(A.S. [1973] 202; Hartcourt [1973] 226-227; Jones & Hechel [1973] 118)。

ところが1974年以降になるとバーノン報告に対する批判的意見がみられるようになる。投稿記事の数も1974年には6編、翌年にはその倍の12編に増加している。1974年以降に投稿された記事を合わせると実に30編に及ぶ。掲載された多くは投書欄に寄せられた記事であり、個人や団体同士による意見の対立が顕著である。

バーノン報告の是非に関する議論を起こすきっかけを作ったのが、1973年に盲弱視教員学生協会(Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students以下、ABAPSTAS)が盲人連合(National Federation of the Blind)との連名で当時の教育大臣に提出したバーノン報告への意見書(Comments on the Vernon Report)である。100ページからなる意見書は、バーノン報告を批判し、盲学校の廃校とすべての視覚障害児のインテグレーション、つまりフル・インテグレーションを主張した。同意見書は1974年のTeacher of the Blindにおいて2ページにわたって紹介された(A.S. [1974] 109-110)。

1974年以降に投稿欄によせられた記事30編のうち、ABAPSTASの意見、すなわちフル・インテグレーションを支持するものは12編、バーノン報告を支持し、分離教育の維持を主張するものは13編であった。両者の意見は真っ向から対立を続けたが、1976年ごろからは二者択一で解消する問題ではないとして通常学校

と盲学校の両者が必要不可欠であると主張する内容の記事が散見されるようになる。1979年までに掲載されたもののうち4編がそれに該当する (Fig. 1)。

残念ながら投稿者が視覚障害当事者であるか否かについて判断できない記事も多いが、1974年以降に掲載された記事30編のうち、把握できたものだけでも当事者によるものは12編であった。投稿された記事の内容から分析すると、その中でフル・インテグレーションを支持したのは7人であった一方で、盲学校の存在が不可欠だと主張したのは5人 (分離教育を支持した投稿者1人、インテグレーションと盲学校の両立を支持した投稿者4人) であった。限られた投稿数から得られた結果ではあるが、いずれの立場にも視覚障害当事者は存在したと言える。

### Ⅲ. インテグレーション議論の内容とその特徴

#### 1. 三つの主張における共通点

ここまで見てきたように、視覚障害児のイン

テグレーションをめぐるのは大きく次の3つの主張に分かれた。一つは盲学校での教育が視覚障害児にとって最適な教育環境だとする分離教育を支持する意見であり、2つ目は通常学校でのインテグレーションが最適な環境であり盲学校の存在を認めないフル・インテグレーションを支持する意見、そして3つ目は両者の中間にあたる盲学校と通常学校でのインテグレーションの折衷を支持する意見である。それぞれの意見を整理すると、一見対極にある、分離教育支持者とフル・インテグレーション支持者の間には、実は、共通した考えが存在する。

共通点の一つ目は分離教育のデメリットとインテグレーションの教育的・社会的意義に対する認識である。インテグレーション支持者は、視覚障害児が障害のない子どもと同様に幼少期から親や地域コミュニティから離れることなく教育を受けることは基本的権利として保障されるべきだと主張した (Avis [1975] 20; Paberz [1976] 16; Wells [1976] 290; Wilkinson [1976]

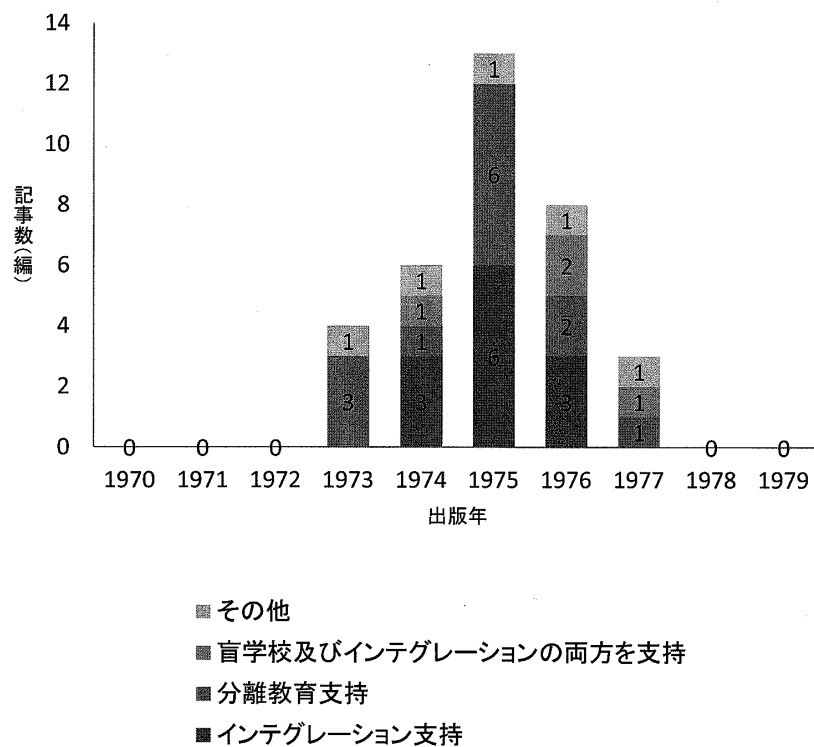


Fig. 1 1970年代に掲載された記事数とその内容

出典：Teacher of the Blind (1970-1979); New Beacon (1972-1979) より筆者作成。

## 1970年代イギリス視覚障害教育におけるインテグレーションをめぐる議論とその特徴

14)。その理由として例えば、多くの大学進学者を輩出したウースター盲学校 (Worcester School for the Blind) の卒業生 White (1975) は、自身が卒業後、コミュニティへの帰属意識がないことに苦悶したことに言及し、寄宿制盲学校で学ぶことは、どんなに質の高い教育を受けたとしても同年代の晴眼児との差異を埋めることはできず、むしろ差異をより顕著にするとしている (White [1975] 8)。また、音楽家で視覚障害当事者であった James (1974) も、幼少期からすべての子どもが同じ環境で学ぶことによるのみ、晴眼児は視覚障害児が「正常 (normal)」であることを理解し、また視覚障害児自身もそう思えるようになることを述べている (James [1974] 237)。

一方、分離教育支持者も、子どもを家庭や地域社会から離さざるを得ない寄宿制盲学校には「明らかな欠点がある」と述べている (John Aird School [1975] 56; Horn, Bignell, Mattew, Pope, & Wood [1975] 294; Vernon [1973] 198-199)。さらにインテグレーションには、晴眼児との交流を通じ、社会的自立を図る上で不可欠な社会性や順応性の習得を促すことも指摘しており、こうした認識は盲学校と通常学校でのインテグレーションの折衷を支持する人々の間でも共通した (Humpston [1975] 122-123; John Aird School [1975] 56; Williams [1976] 37-38)。

二つ目の共通点は、視覚障害児が学ぶ上で必要となる支援に関する見解である。分離教育支持の立場をとる視覚障害教育関係者の間では、視覚障害、特に盲児の場合には晴眼児と比較して発達が遅れるということが共通認識だった (Vernon [1973] 198; Goddard [1976] 36)。つまり視覚障害児と晴眼児では明らかな差異があり、彼らのニーズに応じた特別な教育環境、すなわち、専門的知識を持つ教員や教材教具の整備が不可欠だという認識が強かった (Horne, Bignell, Mattews, Pope, & Wood [1975] 294; John Aird School [1975] 56-57)。

一方、インテグレーション支持者も決して視覚障害児の教育が、晴眼児と全く同様の環境で

保障されるとは述べていなかった (Hughes [1975] 12; Milligan [1976] 14)。例えば ABAPSTAS 創設者でインテグレーション経験者であった Milligan (1976) は、インテグレーションを実現させる条件として、視覚障害に理解のある通常学校を選定し、特別な教材教具と、視覚障害教育の専門資格を持つフルタイムの教員が配属された特別教室 (special unit) を設置することを述べている。同時に、その実現には分離教育と同様にコストがかかることにも言及していた (Milligan [1976] 14)。

### 2. 3つの主張における相違点

このように3者には共通点も見られたが、相違がみられたのも事実である。それではどの視点において相違がみられたのだろうか。

一つは前述した2つ目の共通点に関連している。すでに見てきたように、教育環境をめぐって特に専門教員や教材教具の必要性についての意見は共通していたが、実際にこうした支援内容がどこで、どのようにして提供可能なのかについては根本的相違があった。例えば分離教育支持者が断固として主張し続けたことは、視覚障害児には特別な教育的配慮が必要であることに加え、低発生頻度障害であるがゆえにその配慮をすべての通常学校にいきわたらせることは困難であることの二点だった (Harcourt [1973] 228; Hewitt [1976] 68; Vernon [1973] 198)。分離教育を支持し、盲学校内の職業訓練部門の教員であった Hewitt (1975) も、低発生頻度障害の視覚障害児は、晴眼者が圧倒的多数を占める環境では「二流市民 (second class citizen)」として冷遇されることを警告している (Hewitt [1975] 17)。他方でインテグレーション支持者は、通常学校に特別教室を設置することによりインテグレーションは十分可能だと断言したのであった。

2つ目の相違はインテグレーションの対象者に関する考えである。インテグレーション支持者は、インテグレーションの恩恵を受けるのは、重複障害を除くすべての視覚障害児であるとした。その一方で、分離教育支持者は、インテグ

レーションを実施するとすれば、その恩恵を受けるのはあくまで家庭環境に恵まれ、なおかつ知的・精神レベルともに優れた少数の視覚障害児に限られると主張したのである (Humpston [1975] 123; Snider [1974] 203; Williams [1976] 37)。例えば、インテグレーションの先駆地であるアメリカ合衆国出身の視覚障害当事者で、イギリス5年ほど滞在していたSnider (1974) は、インテグレーションの成功の鍵を握るのは保護者の教育への関心度であると経験者としての意見を寄せている (Snider [1974] 203)。また7歳で失明し、その後盲学校での教育を受けた当事者で、分離教育とインテグレーションの折衷を支持していたWilliams (1976) は、インテグレーションで成功するのは、他者との差異が際立つコミュニティで、自ら帰属意識を築いていくことができる子どもに限るとして精神的成熟度の重要性を指摘している (Williams [1967] 37-38)。全盲男児の保護者であったFerris (1977) も、インテグレーションでうまくいく子どもとそうでない子どもがいると主張していた (Ferris [1977] 10)。

3つ目の相違はインテグレーション支持者が、教育の重要な要素として高い志や強く柔軟な精神力の涵養を掲げていた点である。インテグレーションを支持していたMilliganらは視覚障害者の多くが、晴眼者と同等あるいはそれ以上のスキルと能力を併せ持つにも関わらず、実際には、平均的な国民よりも低賃金で社会的地位の低い職業に甘んじていると述べ、問題視していた (National Federation of the Blind & Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students [1973] 9-11)。その打開策として彼らは、視覚障害児に高い志を有するよう仕向ける「教育的励まし (educational boost)」を与えることを挙げており、またそれは、多くの刺激が得られるインテグレーションを経験することで可能だとした。さらには、視覚障害のような重度のハンディキャップを持つ者が晴眼者中心の競争社会で生き抜くためには、高い適応能力と強く柔軟な精神力を併せ持つことが重要であり、これは柔軟

性に長けた幼少期に晴眼児と切磋琢磨して学ぶ中でのみ体得できると主張した (Hughes [1975] 13; Paberz [1976] 15-16)。

なお、分離教育支持者も社会性や社会適応能力の習得の重要性に言及しており、家族や地域コミュニティからの分離は盲学校教育の紛れもない「欠点」だとしていた。しかし、この欠点は、通常学校との交流や平日寄宿システム (weekly boarding) を採用することによってある程度補うことができるというのが彼らの主張であった。また、中にはChandler (1976) のように社会性等の習得は、盲学校卒業後、すなわち晴眼児者と肩を並べて学習や就労に従事するのに必要な基礎能力・技能を身に付けた後であっても十分可能であると主張した者もいた (Chandler [1976] 37)。

こうして議論は平行線のまま進み、後に感情的対立までも生む。分離教育支持者を代表する盲学校・弱視学校校長会メンバー Horne や Godfrey (1977) は、インテグレーション支持者の主張を「無知な非専門家集団」による「狂乱した議論」と糾弾し、また、視覚障害当事者であったChandler (1976) も、盲学校で提供する同じ質の支援が通常学校でも可能であるとする彼らを、「夢想家」と言い放った (Chandler [1976] 37; Godfrey [1977] 175; Horne, Bignell, Matthews, Pope, & Wood [1975] 293)。一方、インテグレーション支持者もまた、一部の優れた視覚障害児にのみインテグレーションが有効として、依然、盲学校教育を支持する分離教育支持者を「専門家中心主義的」で、「パトロンの」と非難したのであった (Milligan [1976] 15; Paberz [1976] 15)。

### 3. インテグレーションをめぐる議論とその特徴

ここまで三者の間の共通点と相違点とを整理してきた。この議論が平行線のまま進み、感情的対立までも生んだのは、何より、3つ目の相違点、すなわちインテグレーション支持者が、高い志や強い精神力の涵養を学校教育の重要な要素として位置づけ、さらにそれが通常学校に

## 1970年代イギリス視覚障害教育におけるインテグレーションをめぐる議論とその特徴

おいてのみ習得可能としていたことが挙げられよう。それゆえ支持者にとっては盲学校がたとえ、通常学校との交流や平日寄宿システムを採用していたとしても不十分であった。加えて、すべての視覚障害児がいずれは社会に出ることに鑑みれば、精神・知的レベルの高低に関係なくインテグレーションの対象となることが肝要であった。

## IV. おわりに

1970年代イギリスにおいて視覚障害児のインテグレーションをめぐる議論は、バーノン報告(1972)とバーン報告に対する意見書(1973)の発行を皮切りに活発化した。議論は大きく、分離教育支持者と、インテグレーション支持者、そして盲学校とインテグレーションの折衷を支持する者の3つに分かれた。いずれの立場もインテグレーションの教育的・社会的意義、および視覚障害児が教育を受ける上で必要となる支援については共通した意見を有していたが、その支援が提供できる場やインテグレーションの恩恵を受ける対象者について相違がみられた。この根底にはインテグレーション支持者が、学校教育の重要な要素として強い精神力の涵養等を位置づけており、さらにそれが通常学校においてのみ可能としていたことがあった。

ところで、この時代のインテグレーションと類似の様相は、現代においても見られる。例えばインクルーシブ教育議論も、あらゆる分離的形態を否定するフル・インクルージョニストと、インクルーシブ教育という理念は支持しつつも分離的形態も不可欠であるとする対極的意見が併存しながら展開されている。

しかし、明らかに異なるのは議論の内的要素であろう。本研究で焦点をあてた視覚障害教育におけるインテグレーション議論は、インテグレーションが持つ社会的意義を高く評価して支持していた者と、分離教育支持者とが対立し続けたが、議論そのものは通常学校での支援内容やその具体的方法にまでに及んだ。一方、インクルーシブ教育議論は、その概念をめぐる

活発であるものの、具体的内容や方法については未だ希薄である。これはおそらく、インクルーシブ教育が巨大な教育—社会運動であるという特徴を持ち(中村・岡[2005]17)、またその対象範囲もすべての社会的マイノリティと幅広いがためであろう。インクルーシブ教育をめぐる議論は、インテグレーション議論以上に複雑さを伴う。

今後の課題として次の2点を挙げたい。第一に視覚障害教育におけるインテグレーションをめぐる議論を、今回対象とした雑誌以外の雑誌、特に地方に点在する慈善組織の機関誌などを併せて分析することである。先行研究では、インクルーシブ教育(運動)は、親や障害当事者が積極的に関与していること、さらに彼らが自身の対抗勢力としてそれまで主導的立場にいた専門家、健常者を挙げるということが一つの特徴と言われている(中村・岡, 2005)。本研究で焦点をあてた議論にも当事者が多く含まれていたことから、先行研究を支持する結果となった。しかし一方では、今回、限られた資料からではあるが、視覚障害当事者がインテグレーションを支持していた立場のみならず、分離教育を支持した立場にも存在していたことも明らかとなった。つまり、視覚障害児のインテグレーション議論をめぐるには必ずしも「障害当事者」対「専門家」という対立構図が存在しなかった可能性がある。

第二は、ほかの障害種におけるインテグレーションをめぐる議論との比較である。というのも、本研究で明らかになったように1970年代に主要雑誌に掲載されたインテグレーション関連の記事は計33編であった。この数は、例えばNew Beaconには年間あたり120~140編の記事が掲載されていることに鑑みれば少ないように見え、視覚障害教育界においてインテグレーションはそれほど大きな議論にならなかったと結論付けることもできる。このことは、冒頭で触れた視覚障害のインテグレーションの実施が他の障害と比較して遅かった要因にもなるため、後日を期して検討したい。

## 註

- 1) 本研究でイギリスとは、主としてイングランドに限定して使用する。

## 文献

- Anonymous (1973) After Vernon-address given to the annual general meeting of the RNIB by Thatcher, M. *The New Beacon*, 62, 202-206.
- Anonymous (1974) Reviews. *The Teacher of the Blind*, 62, 109-110.
- 新井英靖 (2000) イギリスの「学習困難児」問題への教育的トリートメントに関する一研究-1950年代から1960年代の通常学校における特別な教育の展開過程を中心に. *SNEジャーナル*, 5(1), 56-78.
- Avis, M. J. (1975) Educational provision for the visually handicapped. *The Teacher of the Blind*, 64, 19-21.
- Chandler, E. L. (1976) Letters -integration. *The New Beacon*, 60, 37.
- Department of Education and Science (1972) *The Education of the visually handicapped: Report of the committee of enquiry appointed by the Secretary of State for Education and Science in October, 1968*. Her Majesty Stationary Office, London.
- Ferris, G. (1977) Letters -integration. *The New Beacon*, 61, 10.
- French, S. (2006) *An oral history of the education of visually impaired people: Telling stories for inclusive futures*. E. Mellen Press, Lewiston.
- Goddard, J. W. (1976) Letters -integration. *The New Beacon*, 60, 36-37.
- Godfrey, A. (1977) Integration in Education-2. *The New Beacon*, 61, 173-175.
- Harcourt, B. (1973) The needs of the visually handicapped. *The New Beacon*, 57, 226-231.
- Hewitt, B. (1975) Integration-teaching a manual skill. *The Teacher of the Blind*, 64, 13-18.
- Hewitt, B. (1976) Letters -integration. *The New Beacon*, 60, 68-69.
- Horne, P. Bignell, R.G., Matthews, F., Pope, J.B., & Wood, J. (1975) Letters -integration. *The New Beacon*, 59, 293-294.
- Hughes, J.R. (1975) Letters -integration. *The New Beacon*, 59, 12-13.
- Humpston, W. (1975) Headmasters Association: The education of blind and partially sighted children. *The Teacher of the Blind*, 63, 120-124.
- James, M.R. (1974) Letters -Braille music and integration. *The New Beacon*, 57, 237.
- John Aird School (1975) Open letter on integrated education. *The Teacher of the Blind*, 64, 55-57.
- Jones, C. & Hechel, B. (1973) The Vernon Committee Report: Comments from the college of teachers of the blind, addressed to the Department of Education and Science. *The Teacher of the Blind*, 61, 117-121.
- 河合康 (2007) イギリスにおけるインテグレーション及びインクルージョンをめぐる施策の展開. *上越教育大学研究紀要*, 26, 381-397.
- Milligan, M. (1976) Letters -integration. *The New Beacon*, 60, 14-15.
- 宮内久絵 (2012) 1970年代イギリス視覚障害当事者組織ABAPSTASの創設とインテグレーション要求の本質. *障害科学研究*, 36, 19-31.
- Morris, M. & Smith, P. (2007) *Educational provision for blind and partially sighted children and young people in Britain: 2007*. Royal National Institute for the Blind people.
- 中村満紀男・岡典子 (2005) アメリカ合衆国におけるフル・インクルージョン論と障害マイノリティ創出の諸要素-視覚障害と分離の観点から-. *心身障害学研究*, 29, 17-33.
- National Federation of the Blind & Association of Blind and Partially Sighted Teachers and Students (1973) *Educational provision for the visually handicapped, comments on the Vernon Report*.
- Oka, N. & Nakamura, M. (2005) Criticisms of full inclusion in the United States by an organization for people who are blind and teachers of students with visual disabilities. *The Japanese Journal of Special Education*, 42, 547-558.
- Paberzs, M. (1976) Letters -integration. *The New Beacon*, 60, 15-16.
- Snider, H. (1974) Crossing the Atlantic does make a difference. *The New Beacon*, 58, 203-207.
- 徳永豊 (2005) 「特別な教育的ニーズ」の概念と特殊教育の展開: 英国における概念の変遷と我が国における意義について. *国立特殊教育総合研究所研究紀要*, 32, 57-67.
- Vernon, M. D. (1973) Problems in the education of



1970年代イギリス視覚障害教育におけるインテグレーションをめぐる議論とその特徴

- visually handicapped children. *The New Beacon*, 57, 198-200.
- Wells, J.A. (1976) Letter -integration. *The New Beacon*, 61, 290-291.
- White, T.H. (1975) Letters -Chorleywood & Worcester. *The New Beacon*, 59, 8-9.
- Wilkinson, B. J. (1976) Letters-integration. *The New Beacon*, 60, 13-14.
- Williams, J. (1976) Letters-integration. *The New Beacon*, 60, 37-38.
- 2014.8.31 受稿、2014.11.19 受理 ——

## The Arguments on Integrated Education for the Visually Impaired in the 1970s, England

Hisae MIYAUCHI

The purpose of the present study was to clarify the arguments seen in the 1970s, England regarding integrated education for the visually impaired using the two journals; *The Teacher of the Blind* and *The New Beacon*. The arguments on integration started to be seen from 1973 and became most active in the mid-70s. Within the different arguments, the following stances were seen; the stance which claimed that school for the blind is the most appropriate place to receive all-rounded education and emphasized the importance of segregated education, the stance which claimed the importance of integrated education and demanded closer of all schools for the blind, and the stance which claimed the importance of having the flexibility on where visually impaired students are educated. All three stances understood the social/educational significance of integrated education and also agreed on the types of support needed by the visually impaired students to receive quality education. However, disagreement was seen on where the quality education can be provided and whom would most benefit from integration.

**Key words:** integrated education, England, education for the visually impaired